

経営学を学ぶ留学生のための発音訓練 —発音訓練問題作成までのプロセス—

新 垣 公 弥 子

1. はじめに

現在、大学における学部留学生の多くが私費留学生である。大学における講義を受講して理解し、かつ単位を取得できる能力を有することが受験資格となっているし、また大学側でもそれを入学の基準としている。以上が学部留学生に必要な日本語能力の概略であるが、実際問題として、留学生が入学した後、直面する問題としては、単位の修得率というものがあげられる。例えば、本学部では43単位までの取得が1年生で可能となる。しかし、留学生の場合平均38、40ということが多く見られる。それから上級生になると、演習では口頭発表が課せられる。その場合には、いわゆる発音面が問題点としてあげられる。本稿では学部留学生の発音がどのような状況にあるのか具体的なテストでの誤読例を示しながら、分類し考察していきたい。

①学部留学生が、入学後、大学における講義を受講し、単位取得ができるようになる。

②演習における口頭発表を行う際に、円滑に発音できるようになる。

以上の点を目標とし、発音そのものの問題点を明らかにしながら、誤読を少なくするための問題作りを目指すプロセスについて考察したい。

日本語は、基本的には子音 (Consonant) と母音 (Vowel) の組み合わせにより構成されるCV構造である。例えば「花」[hana] という子音と母音の組

み合わせである。この基本構造に加えて特殊拍というものがある（q、C_N、V構造といったものである）。例えば「各国」（かっこく）と「過酷」（かこく）といった区別は、日本語において撥音（q構造）が意味を弁別する音素であることに起因する。それから「盛ん」（さかん）と「参観」（さんかん）といった促音（C_N構造）も特殊拍であるし、「お婆さん」（おばーさん）と「叔母さん」（おばさん）といった長音（V構造）も特殊拍のひとつである。以上、日本語の中には3種類の特殊拍があり、これらはいずれも留学生が習得しにくい音素であるといえる。

これらに加えて、発音習得を困難にしている一翼を担うのが、有声音と無声音との弁別である。例えば「課題」（かだい）と「硬い」（かたい）といった区別である。これらの区別は、特に中国語、韓国語を母語とする留学生にとっては母語の干渉を受け、その区別の習得が難しい。発音の面では、これを制すことができれば、日本語を制したといっても過言でないほどに重要課題であるといえる。

本学の留学生は、1年生のうちに4科目8単位の日本語を履修することが多い。場合によっては英語や他の言語を履修することもあるが、基本的には日本語を履修することになっている。1年生で履修を終えると、その他に日本語を学習する機会はほとんどない状況にあるといえる。2年生になると、ゼミという形式で各論を学ぶことになる。その折には、レジュメを作成し、ゼミにおいて、いわゆる演習形式で口頭発表を行なわなければならない。口頭発表の際には留学生の「発音の悪さ」というものが指摘されることが多い。例えば「組織」を「そうしき」と発音すれば、日本語を母語とする者には不快に感ずるであろう。やはり「葬式」と聞き取れるし、どんなに発表内容が良かったとしても、円滑なコミュニケーションを取れているかといった視点からすれば、円滑ではないといわざるを得ない。

このようないわゆる「発音の悪さ」というものをどれくらい緩和していけるか、1年生の前期は比較的緩やかに学習を進めていくべきかどうか、非常

に悩ましいところではあるが、1年生のうちに日本語の履修を済ませておかなければならないという現状では、やはり集中的に発音の問題に対処する必要性を痛感した。そこで、今年2005年度は、経営学をご専門となさる諸先生方に基本文献をご紹介いただき、小松章著『基礎コース経営学』をテキストとし、その中の専門用語あるいは一般的な日常用語であっても留学生にとって難読であると予測される語彙についてはできる限り設問として取り上げ、単語、複合語の形で作問した。1回50題を作成しテストとした。その結果、円滑なコミュニケーションが取れない、もしくはとりにくい学生ほど、読み方の間違いが多いことがわかってきた。その点を克服するために、採点后、返却する際には、まず、解答を学生に板書してもらい、その間違いや、補足を教師が補う形をとり、その後で音読の練習を行った。

1. 1 学部留学生の属性

2005年度本学経営学部に入学者で、調査対象は9人の中国語母語話者である。日本語の学習期間は平均2年、経営学を主専攻とする学部1年生である。

日本語習得レベルとしては、平均、日本語能力検定試験1級合格（280点）程度である。日本語能力検定試験1級の場合、語彙数10,000語、漢字2,000字、学習時間900時間以上が求められている。これは新聞が読めるレベルであり、漢字の数だけで見ると、日本人の中学校卒業レベル（常用漢字1,945字）にほぼ相当する。

次に来日する留学生の数を見てみると、独立法人日本学生支援機構の2004年度（2004年5月1日現在）留学生受け入れ概況報告によれば、留学生117,302人のうち77,713人（66.3%）が中国からの留学生で、そのほとんどが私費留学生である。加えて留学生の出身国をみてみると中国が第1位で、前年度よりも6,899人（9.7%）の増加となっている。本学の場合もその例にもれず、2005年5月1日現在、留学生175人（28ヶ国）のうち、103人（59%）が中国か

らの留学生で、うち87人(84.5%)が私費留学生である。また、本学部に在籍する留学生は68人で、その内訳は学部留学生45人(国費1)、大学院博士前期課程17人(国費1)、大学院博士後期課程1人、研究生5人(国費1)であり、およそ95.5%が私費留学生である(学内資料による)。

これらの学部留学生の留学の目的は、第1に日本語を習得したのち帰国し、外資系の企業に勤めたい。第2に日本企業に就職したい、というような順になっている。帰国後のことや就職のことを考え、学士の取得のみにとどまらず、修士、博士の取得を目指す者も多いのが現状である。

1. 2. 1 試験の内容と改善点

留学生が大学に入学するまでには、「日本語能力試験」「日本留学試験」というものを受験する必要がある。「日本能力試験」は書き言葉を重視していたのに対し、「日本留学試験」では、主にキャンパス内で使用頻度の高い話し言葉を重視する点が、両試験の大きく異なる点である。本稿では「日本語能力試験」に絞り、その中でも留学生がもっとも苦手意識を持っている点について述べたい。

留学生は、「日本語能力試験」の1級を受験し、合格するレベルに達していることが一応の大学入学の基準となっている。「日本語能力試験」1級は、大きく「文字・語彙」(45点・100分)、「聴解」(45点・100分)、「読解・文法」(200点・90分)というように分かれている。その内容を概略すると(資料1)に示したとおりになる。これは2001年度の実際の試験を、およそ10分の1の量に縮約した形である。時間にすれば、約4分で以下の問題を解答する計算になる。

留学生にとっては、問題Iの(2)「自己」というような語彙の読み方の正答率が低い。それはこの語彙が濁音と清音の組み合わせになっているからであると考えられる。留学生は「じご・じこ・しご・しこ」といった選択肢で混乱する。これに加えて「じっこ・じこう(じこー)・じこん」のような特殊

拍を織り交ぜた選択肢にも正答率が低くなる傾向が見受けられた。本試験では「1じき・2じぎ・3じこ・4じご」といった選択肢が用意されているが、むしろ日頃の留学生の発音訓練には、「じご・じこ・しご・しこ・じっこ・じこう（じこー）・じこん」といった選択肢を用意することが必要なのではないかと考える。

(資料1) 『2001年度 日本語能力試験試験問題と正解1級・文字と語彙』を基に筆者編集

問題Ⅰ 次の文の下線をつけた言葉は、どのように読みますか。その読み方をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。

問 全力を尽くして 自己の記録に挑むことに意義がある。

	(1)	(2)	(3)	(4)		
(1) 尽くして	1 かくして	2 たくして	3 つくして	4 なくして		
(2) 自己	1 じき	2 じぎ	3 じこ	4 じご		
(3) 挑む	1 いどむ	2 つかむ	3 はげむ	4 はばむ		

問題Ⅱ 次の文の下線をつけた言葉は、ひらがなでどう書きますか。同じひらがなで書く言葉を、1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1) 学生たちが街頭で募金をしていた。

- 1 回答 2 沸騰 3 該当 4 奮闘

問題Ⅲ 次の文の下線をつけた言葉は、どのような漢字を書きますか。その漢字をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1) ふんいき	1 風囲気	2 風意気	3 雰囲気	4 雰意気
(2) はなやか	1 桜やか	2 華やか	3 雅やか	4 優やか
(3) ひとがら	1 人体	2 人柄	3 人陰	4 人殻
(4) みりよく	1 塊力	2 魂力	3 醜力	4 魅力

問題Ⅳ 次の文の下線をつけた言葉の二重線()の部分は、どのような漢字を書きますか。同じ漢字を使うものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1) 自分のきょうぐうに満足している。

- 1 ドイツはフランスとこっきょうを接している。
- 2 今年はきょうさくで、収穫がほとんどなかった。
- 3 機械化により、豊かな生活をきょうじゅできるようになった。
- 4 犯人からきょうはくされた。

1. 2. 2 読解能力と発音能力

(資料2)

『2001年度 日本語能力試験試験問題と正解1級・読解』を基に筆者編集

問題1 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。答えは、1・2・3・4から最も適当なものを一つ選びなさい。

法の下での人間平等は、憲法でも保障された人間の権利である。しかし現実には、すべての人間や人間活動に平等が保障されているわけではない。社会的・民族的差別の問題に関する平等・不平等問題を論じる。

例えば親の階層（職業や所得）の不利さが子供の学歴達成に支障となることを考えてみよう。親の所得が高くないために、子供が大学進学をあきらめたケースはどうだろうか。奨学金制度が充実しておれば、本人の能力と努力がある限り、大学進学の道は開かれている。わが国の奨学金制度がさほど充実していないことは、アメリカとの比較で明らかである。わが国には機会の不平等が残っていると見える。逆に、アメリカでは機会の平等への執着は強いといえる。もっともわが国においも、国民の所得水準が向上したことによって、親の経済力が原因となって進学できないというケースは以前より減少しており、この問題の不平等性は低下している。

もう一つ例をあげてみよう、企業が新卒者を採用する時に指定校制度というものがある。特定大学の学生のみを受験・面接の機会が与えられ、他の大学生にはその機会がない制度である。企業がこの制度を採用する理由は次の通りである。第一に、入学試験の難しい大学や、良い教育をしている大学の学生は、知的活動や生産性の上で優秀な学生という印象がある。第二に、それらの大学の卒業生が、企業で良い成果をあげていることをその企業が知っている。

第三に、応募してくるすべての学生を無制限に選考すればコストがかかる。これらを要約すれば、企業にとっては合理的かつ選択のリスクが小さい制度なのである。

ただし、ここで指定校制度の合理性を指摘することによって、「受験戦争」を肯定する気はない。（中略）過酷な「受験戦争」には負の側面が多いので、戦争をなくする必要性は高い。

ところで、特定大学以外の学生にとっては、就職試験の機会が最初から排除されているので、機会の不平等と映るかもしれない。確かにその側面があることは否定しえないが、よく考えるとその人達にも特定の大学の受験の機会が高校生の時にあったわけで、機会の平等が完全に排除されていたとはいえない。実際にその大学を受験したかどうかは問題ではない。しかし高校生にまで企業に指定校制度があることを知っている、と期待するのは酷である。機会の平等をこのように考えていると、意外に複雑な原理なのである。

機会均等の原理を実施することはそう容易ではないが、理想として常に念頭におかれるべき原理である。すべての意欲ある人には、参加と競争の機会が与えられることが望ましい。教育の機会、就職の機会、昇進の機会、人生上の様々な活動において多くの人に平等な機会が与えられた末に、参加者が競い合うこととなる。競争の結果勝

者と敗者が出ることは仕方のないことだし、勝者にも順位づけが行われることもやむをえない。
(橋本俊詔『日本の経済格差』岩波書店)

以上は、2001年度「日本語能力試験」の読解問題の一部であるが、この文章をおよそ10分で読解する力が留学生には必要である。決して容易な文章ではなく、筆者が本稿で試みようとするような経営学の専門用語を学習する必要もないくらいの高いレベルに到達しているように一見みえる。しかし、実際には特に漢字圏の留学生にとって読解は、比較的高得点に結びつきやすい試験項目である。読解、文章作成が一定のレベルに達している場合、大学の講義を受講し、単位を取得できる能力を有しているものと判断してしまいがちであるが、発音と前述の能力とは分けて考えた方がよい。

1. 2 到達目標

本学における学部留学生の日本語教育は、基本的に日本語能力検定試験1級合格程度あるいは日本留学試験により選抜されたもので、大学で行われる一般的な日本語で行われる授業に問題なく参加できることが前提となる。留学生の多くは、これまでの日本語の授業とは異なり、専門的な分野を学べるということに、非常に興味を持っている。これは日本人大学生も同様で、日本語（国語）、数学といった高等学校で学んできたような一般教養科目よりもむしろ専門科目を学べるということに、強く関心を持っているようである。そこで、本講義では『基礎コース経営学』（小松章著）を用いながら、その用語についてテストを作成し実施した。テスト結果は分析し、学部留学生が実際の講義でどの程度、内容を理解できているのかという点について考察した。1年間の講義終了時には（資料3）の文章が途切れることなく、音読できることを目標として設定した。

株式公開 人の一生と同じように会社にも「一生」をあてはめた場合、株式会社にとって、成人式にあたるものは、株式の公開である。株式会社は、もともと発起人以外の多数の人々から出資資本を調達できるメカニズムを内包した企業形態であるが、その機能は、まさに株式を市場に公開してこそ完全に発揮されるのである。

いってみれば、株式会社は、株式公開によって制約的に一人前となるのである。株式の公開により、特にそれが証券取引所への上場である場合には、資本調達の手段は、飛躍的に向上することになる。私たちの会社も、創業以来、経営者・従業員が一丸となって努力を重ねてきた結果、順調に業績を伸ばしてきた。

2. テスト内容と実施方法

『基礎コース経営学』小松章（2004）をテキストに問題を作成しテストを実施した。テストは講義開始後のおよそ15分間である。2005年度における筆者の日本語担当コマ数は週に3回前後期で、実施回数はおよそ90回である（3回×15回×2期=90回）。第1回目の講義で使用した漢字テストの概要は次のとおりである。

(資料4)

経営学に関する漢字学習（企業と経営） 1

1 企業と経営	_____	26 価格破壊	_____
2 生産活動を行う	_____	27 内外価格差を維持する	_____
3 人間の労働力から機械へ	_____	28 調達コスト	_____
4 消費生活を楽しむ	_____	29 証券取引	_____
5 家庭に還元される	_____	30 国際的な資本市場	_____
6 サービス産業の増加	_____	31 多国籍化	_____
7 情報通信技術の発達	_____	32 現地化の推進	_____
8 生活文化を形成する	_____	33 国際分業の発展	_____
9 新しい文化の創造者	_____	34 教育活動への影響	_____
10 情報収集を欠かさない	_____	35 分業や協業	_____
11 生産すべき商品の決定	_____	36 個性より協調精神	_____
12 生産に必要な原材料	_____	37 生産技術を身につける	_____
13 労働者を雇う	_____	38 長期的な視野	_____

14 市場で成立する価格	_____	39 職場内教育	_____
15 取引の過程	_____	40 学歴中心主義	_____
16 情報の効率的利用	_____	41 資格中心主義	_____
17 取引コストの低下	_____	42 短期志向に傾く	_____
18 情報発信基地	_____	43 即戦力になる人	_____
19 企業の求人情報	_____	44 創造的破壊	_____
20 大量生産大量消費社会	_____	45 創造的な商品開発	_____
21 小企業社会	_____	46 文化創造活動	_____
22 資本調達活動	_____	47 仕事が生きがい	_____
23 意思決定の稟議	_____	48 職場での仕事	_____
24 国際分業のコスト削減	_____	49 環境の善し悪し	_____
25 世界市場での競争	_____	50 職場での人間関係	_____

2. 1 誤読別語彙の分類

留学生が誤読する場合にはいくつかのパターンがみられる。「I 有声音として誤読した語彙の例」「II 無声音として誤読した語彙の例」「III 特殊拍を挿入した誤読例」「IV 特殊拍を脱落させた誤読例」「V 誤読」、そして「VI 誤読しなかった語彙の例」となる。そのパターン別に分類し示せば[表1]のようになる。ただし、「消費生活を楽しむ」「生活文化を形成する」といった設問で、同じように「せいがつ」と誤読していた場合には、「番号」の項に問題番号を併記し、「問題」「誤読語」「誤読例」ではひとまとめにして記す。

[表1-1] I. 有声音として誤読した語彙の例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	20	大量生産大量消費社会	大量	だいりょう
2	4, 8	消費生活を楽しむ	生活	せいがつ
3	22, 28	資本調達活動	調達	ちやうだつ
4	22, 46	資本調達活動	活動	がつどう
5	27, 14, 26	内外価格差を維持する	価格	かがく
6	30, 24, 33	国際的な資本市場	国際	ごくさい

7	29	証券取引	証券	しょうげん
8	34	教育活動への影響	影響	えいぎょう
9	41	資格中心主義	資格	しがく
10	31	多国籍化	多国籍化	たごくせきか
11	18	情報発信基地	基地	きじ

話し手である留学生は、「27価格」を「かがく」、「29証券」を「しょうげん」、「34影響」を「えいぎょう」、「18基地」を「きじ」、「16資格」を「しがく」というように理解し発音していることがわかった。また50問題について、漢字を含む語に分割すると、132項目となった（重複語彙も含む）。[表1-1]～[表1-6]の「Ⅰ有声音として誤読した語彙の例」「Ⅱ無声音として誤読した語彙の例」「Ⅲ特殊拍を挿入した誤読例」「Ⅳ特殊拍を脱落させた誤例」「Ⅴ誤読み」の例も合わせると、59項目を誤読している。これはおよそ45パーセントの漢字を誤読していることになる。このように45パーセントもの読みを誤読しているということは、大学の講義のほとんどを聞き取れないということになるのではないかという懸念を抱かざるをえない。この点については留学生自身にも十分に注意を促し、漢字の読み方訓練を強化していく必要がある。

[表1-2] Ⅱ.無声音として誤読した語彙の例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	2, 34, 46	生産活動を行う	活動	かつとう
2	3	人間の労働力から機械へ	労働	ろうとう
3	12	生産に必要な原材料	原材料	げんさいりょう
4	40	学歴中心主義	主義	しゅき

話し手である留学生は、「主義」を「しゅき」というように理解し発音していることがわかる。

[表1-3] III.特殊拍を挿入した誤読例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	40	学歴中心主義	主義	しゅうぎ
2	44	創造的破壊	破壊	はっかい
3	25	世界市場での競争	世界	せっかい
4	5	家庭に還元される	家庭	かつてい
5	15	取引の過程	過程	かつてい
6	14, 26	市場で成立する価格	価格	かっかく
7	36	個性より協調精神	個性	こっせい
8	39, 48	職場内教育	職場	しょくばん
9	37	生産技術を身につける	技術	ぎじゅうつ

話し手である留学生は、「主義」を「しゅうぎ」「破壊」を「はっかい」、「世界」を「せっかい」というように理解し発音している。

[表1-4] IV.特殊拍を脱落させた誤読例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	14, 30	市場で成立する価格	市場	しじょ
2	46	文化創造活動	創造	そうぞ
3	35, 33	国際分業の発展	分業	ぶんぎょ
4	35	分業や協業	協業	きよぎょう
5	19	企業の求人情報	情報	じょほう
6	10	情報収集を欠かさない	収集	しゅしゅう
7	21	小企業社会	小	しよ

話し手である留学生は、「市場」を「しじょ」というように理解し、発音している。

[表1-5] V.誤読

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	13	労働者を雇う	雇う	かよう

2	25	世界市場での競争	市場	しば
3	43	即戦力になる人	即戦	きせん
4	44, 45	創造的破壊	創造的	ちょうぞう
5	5	家庭に還元される	還元	かんえん
6	16	情報の効率的利用	効率的	こうりつの きりつ
7	23	意思決定の稟議	稟議	こうぎ
8	50	職場での人間関係	職場	しょくじょう
9	3	人間の労働力から機械へ	機会	きき
10	19	企業の求人情報	求人	きゅうにん
11	24	国際分業のコスト削減	削減	しょうげん
12	21	小企業社会	小	こ

[表1-6] VI.正拍化した語彙の例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	23	意思決定の稟議	決定	けつてい
2	18	情報発信基地	発信	はつしん

VII.誤読しなかった語彙の例

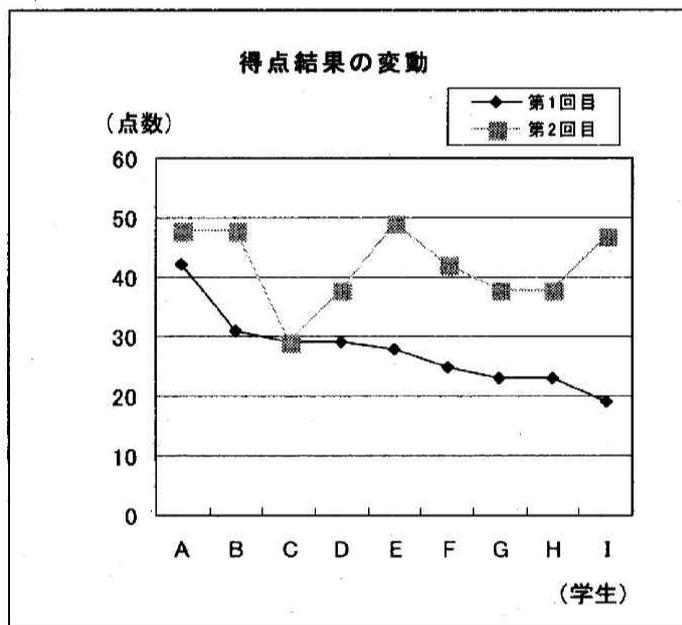
次にあげる例は誤読がなかった例である。企業と経営(1)、サービス産業の増加(6)、情報通信技術の発達(7)、新しい文化の創造者(9)、現地化の推進(32)、長期的な視野(38)、短期志向に傾く(42)、仕事が生きがい(47)、取引コストの低下(17)、生産すべき商品の決定(11)、環境の善し悪し(49) (無解答者多数)

以上は、留学生が誤読しなかった語彙項目である。語彙の後の()内の数字は、テストの番号を示す。また「環境の良し悪し(49)」の設問は全学生が空欄解答であった。このような和語については、留学生が読めないことが多いので強化訓練対象語彙であるといえる。

2. 2テストによる得点結果の変動

上記の語彙テストを採点后、返却する際には、まず解答を学生に板書してもらい、その間違いや、補足を教師が補う形をとり、その後で音読の練習を行った。

同じ内容のテストであれば、1回目にテストを行った時よりも、2回目にテストした方が、得点が伸びるということは当然予測される結果である。そこからもう一步踏み込んで、まずいくつかの要素に分けて得点の伸びについて分析していく。



[表2]

学生	第1回目の得点	第2回目の得点	得点の伸び
A	42	48	6
B	31	48	17
C	29	29	0
D	29	38	9
E	28	49	19
F	25	42	17
G	23	38	15
H	23	38	15
I	19	47	28
9	249	377	126

最も得点を伸ばしたのは学生Iで28点の伸びであった。これに対して、得点の伸びの最も悪かったのは学生Cで得点の伸びは0であった。得点の伸びの平均はおよそ16点である。

次に、2回目のテストでも誤読される語彙は、どの項目の語彙なのかについて観察する必要がある。第2回目に実施したテストにおいても、第1回目と同様に誤って解答された問題とその誤読例、誤読者数をあげた。その誤読を分類すると以下のようなになる。

[表3]

通番	問題番号	問題	誤読語	誤読例	誤読者数
I. 有声音として誤読した語彙の例					
1	26, 14	価格破壊	価格	かがく	5
3	20	大量生産大量消費社会	大量	だいらょう	3
4	29	証券取引	証券	しょうげん	3
5	4, 8	消費生活を楽しむ	生活	せいがつ	2
6	28	調達コスト	調達	ちょうだつ	2
7	31	多国籍化	多国籍化	たごくせきか	2
8	40	学歴中心主義	主義	しゅうぎ	3
III. 特殊拍を挿入した誤読例					
1	44	創造的破壊	破壊	はっかい	4
2	15	取引の過程	過程	かつてい	2
3	39, 48, 50	職場内教育	職場	しょくばん	2
4	40	学歴中心主義	主義	しゅうぎ	3
IV. 特殊拍を脱落させた誤読例					
1	35	分業や協業	協業	きよぎょう	2
V. 誤読					
1	43	即戦力になる人	即戦	きせん	5
2	24	国際分業のコスト削減	削減	しょうげん	4
3	19	企業の求人情報	求人	きゅうにん	2

「I. 有声音として誤読した語彙の例」、「III. 特殊拍を挿入した誤読例」は習得が難しいようである。「I. 有声音として誤読した語彙の例」は第1回目のテスト[表1-1]では、11項目の誤読が認められた。これに対して第2回目のテスト[表3]では8項目の誤読を確認した。この比較から誤読率は減少していることがわかる。一方の[表1-2]「II. 無声音として誤読した語彙の例」は第1回目には4問の誤読があり、第2回目にはすべての項目で正解している。以上から、中国語を母語とする留学生にとっては、日本語の語彙を有声音として誤

読しやすく、加えてそれは修正、習得しにくい発音課題であると考えられる。

上記にあげた語彙は中国語を母語とする日本語学習者が誤読しやすい、そして習得しにくい語彙であるといえる。この点を重点的に漢字の読み方と、発音の訓練を行えば、円滑な発話の習得も容易になるものと考えられる。さらに口頭発表における発音面での不快な箇所の修正にも役立つものと考えられる。

おわりに

本稿では、経営学における語彙を基に、留学生が誤読する日本語の漢字の読み方について考察した。有声音・無声音の区別の習得、特殊拍を含む語の習得は中国語を母語とする留学生にとってはかなり困難な課題であるといえる。視覚によって留学生の発音の間違いを見て取ることができるという観点から、「日本語能力試験」(資料1)の問題パターンは有効であると考えられる。出題パターンとしてはこれに従い、『基礎コース経営学』にみられる語彙、センテンスを基に次のような問題を試みた。

例1 『日本語能力試験試験問題と正解1級・文字と語彙』を基に筆者作成

問題1	次の文の下線をつけた言葉は、どのように読みますか。その読み方をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。			
問1	大量生産大量消費によって、 <u>価格破壊</u> が起きている。			
	(1)	(2)		
(1)大量	1 たいりょう	2 だいらょう	3 たりょう	4 だいらよ
(2)価格	1 かがく	2 かかく	3 ががく	4 がかく
問2	<u>職場</u> での人間関係を友好に保つには、個人の <u>主義</u> 主張を許容することが大切である。			
	(1)	(2)		
(1)職場	1 しょくばん	2 しょくば	3 しょっくば	4 しょぐばん
(2)主義	1 しゅぎ	2 しゅうぎ	3 しゅっぎ	4 しゅうぎ
問3	生産性を高めるためには、 <u>作業</u> の分業や <u>協業</u> が必要である。			
	(1)	(2)		
(1)作業	1 さぎよ	2 さぎょう	3 さくぎょう	4 さくぎよ
(2)協業	1 きょうぎょう	2 きよぎょう	3 きょうきよ	4 ぎょうぎよ

このような試験の形態は、成人してから外国に留学することの多い留学生にとっては有効な学習方法であると考えられる。これまでは、留学生の基礎教育ないし学部入学以前の教育にその力を傾注しなければならなかったが、ある程度入学以前の教育の質が安定してきた現在の状況、そして留学生の日本語能力が年々向上している状況をも、留学生教育は次の段階へと進むべきであると考え。具体的には、各学部における概論書をテキストとし、漢字の読み方を問うテストを作成し、解答してもらおう。そして答えあわせを行い、発音訓練を行う。視覚と発音を合わせた発音訓練の繰り返しが、いずれ必要不可欠となる口頭発表の際の、適切な発音習得に有効であると考えられる。

今年度は、講義の仕上げとして（資料5）に示した『基礎コース経営学』の一部を音読してもらった。以下に示したレベルの文章であれば、日本語を母語とする者に対して不快を与えないような音読ができるようになってきた。

（資料5）

『基礎コース経営学』 p.80より引用

株式公開は、設立時以来、発起人と募集に応じた少数の範囲の株主とからなる創業株主によって限定的に所有されてきた株式会社が、所有権を開放し、会社から多数の株主を受け入れることによって、まさに株式会社本来の形態に脱皮する行為にほかならない。つまり、株式会社は、株式公開によって初めて十全な意味での株式会社になりうるものであり、逆にいえば、株式を未公開の株式会社は、たんに法形式上、株式会社として存立しているというにすぎず、経済上は、株式会社としては未完成であるといわなければならない。

株式公開は、通常、「増資（資本金の増額）」に合わせて、その増資新株を証券市場を通じて広く売り出すことにより、実現する。証券市場では、誰もが自由に買い手として参加できるから、株式公開は、不特定多数の投資家を株主として受け入れることになる。ちなみに、同族色の濃い企業の中には、株式公開を嫌う傾向がみられるが、その理由はまさにこの点にある。不特定多数の投資家を、自分たちの「身内」とみるか、それとも得体の知れない「よそ者」とみるかの違いが、株式公開に踏み切るか否かの分かれ目になっているといっていよう。

本研究の資料は、学部留学生のための発音訓練問題を作問する場合の基礎資料として利用していきたい。今後もこのような基礎資料を整え、学部留学生が専門用語の発音習得をする場合の一助となれば幸いである。この訓練な

らびに習得は、大学における講義時の聴解はもとより、口頭発表を行う場合においても有効であると考えられる。

専門教育に関連する日本語訓練のための問題集が少ない状況で、学部留学生が単位取得に向けて学習する環境を早急に整える必要性を痛感していた。2005年度は日本語のクラスで実施したテストを分析しながら、より高い学習成果を目指した問題作成に取り組んだ。2006年度はこれに加筆修正を加えながら、よりコンパクトで整理された問題集作成に取り組みたいと考えている。

参考文献

- 嵐 洋子 (2003) 「幼児の特殊拍意識の発達に関する一考察」『音声研究234号』日本音声学会
- 岩田 礼 (2001) 「中国語の声調とアクセント」『音声研究226号』日本音声学会
- 奥村訓代 (2005) 「大学の学部における日本語教育の使命と役割」『日本語教育126号』日本語教育学会編
- 大城朋子 (2001) 「日本語学習者のための沖縄の地域共通語—地域に根ざした教材作成のための基本語彙に関するパイロット調査—」『日本語教育108号』日本語教育学会編
- 川越いつえ他 (2002) 「借用語における促音」『音声研究229号』日本音声学会
- 小松 章 (2003年初版・2004第3刷) 『基礎コース経営学』新世社
- 庄司恵雄 (2004) 「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」『日本語教育122号』日本語教育学会編
- 新試験研究グループ著 (2002) 『日本留学試験標準問題集改訂新版』ユニコム
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究233号』日本音声学会
- 日本語教育学会編 (2000) 『日本語教育辞典』大修館書店
- 日本国際教育協会 (2001) 『日本語能力試験試験問題と正解1・2級』国際交
- 経営学を学ぶ留学生のための発音訓練—発音訓練問題作成までのプロセス— 275

流基金

- 張 麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
- 陳 生保 (1996) 「中国語の中の日本語」『日本文化フォーラム』国際日本研究センター
- 彭 飛 (1998) 「日本語と中国語の対照研究が抱える諸問題をめぐって (1)」『無差』京都外国語大学日本語学科
- 彭 飛 (2003) 『日本語の特徴』凡人社
- モイラ・イップ (2002) 「広東語の借用語音韻論：音声知覚と音韻構造」『音声研究229号』日本音声学会
- 森田良行 (1987) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 劉 秋燕 (2002) 「日本語母語話者と台湾の日本語学習者における閉鎖音/d/と弾き音/r/の知覚」『音声研究231号』日本音声学会

参考資料

http://www.jasso.go.jp/kikaku_chosa/ryugaku_chosa/16004.pdf 日本留学生支援機構留学生受入れの概況 (2004年版) (アクセス日2005.8.13)

—謝辞—

本稿では、経営学を学ぶ留学生のための発音訓練問題集作成のプロセスについて論じた。本稿執筆にあたっては、大城朋子先生、尚真貴子先生にご指導いただいた。また、問題作成に関しては、本学の留学生ならびに日本語教師を目指すみなさんに多くの意見をいただいた。以下に記してお礼申し上げます。

金山月さん、高燕霞さん、魏鳳平さん、諸子華さん、石梅さん、蘇榮さん、楊柏明さん、劉衍智さん、門松文郎さん、陳雅玲さん、陳斌さん、レナート・カルディナスさん、ロジェリオ・タカキさん、小池明子さん、田原裕貴さん、佐藤翔大さん (順不同)